

はじめに

杉浦郁子（和光大学現代人間学部）

この冊子には、東北六県で性的マイノリティの場づくりをしている皆さんへのインタビューが収められています。23名の方にご協力いただき、2019年夏時点の東北における活動の多彩さを、ここにとどめることができました。インタビューに快く応じてくださった皆さんに心より感謝申し上げます。

\* \* \*

首都圏に住む私が地方の活動に興味をもったのは、東日本大震災がきっかけでした。当時、私は東京の任意団体「“共生社会をつくる”セクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク」（略称「共生ネット」）のメンバーでした。共生ネットは、発災後に、「東日本大地震の被災地におけるセクシュアル・マイノリティへの対応に関する要望書」を緊急災害対策本部に提出し（2011年3月17日付で第2版を提出）、それをウェブサイトにも掲載しました。内容は、性的マイノリティの視点から避難生活におけるニーズをまとめたもので、救援や避難所運営に関わる人たちに「支援にあたっては性的マイノリティがいるのを忘れないで」ということを伝えようとしたものでした。

この要望書には、LGBTコミュニティ内部でも賛否がありましたが、「避難所にいる当事者があぶり出されてしまう」「支援情報の発信にともなってアウティングや二次被害が懸念される」という声には考えさせられました。それ以来、「支援や肯定的な情報発信さえ控えてほしい」という要求の背後にある東北（あるいは地方）の状況を知りたいと思うようになりました。

2012年には、卒業論文を執筆した4年生が地方の支援活動をテーマにしたため、学生と一緒に2名の方にインタビューをしました。話をうかがって思ったのは、「地方でも可能なんだ」ということではなく、「地方だから可能なことがある」ということでした。いま振り返ると、「都会／田舎」「リベラル／保守」「豊かさ／貧しさ」「カミングアウト／クローゼット」などの二分法的な視線——メトロノーマティブな発想——で「地方」をとらえたうえで、「新たな発見」をした気になっていただけでしたが、地方の活動の実態を調べたい、という思いが強くなっていきました。

\* \* \*

調査に向けてようやく小さな一歩を踏み出したのは、2016年秋のことでした。

その前年に、「震災以前の東北六県に九つあったセクシュアルマイノリティ団体は、震災後に三〇になった」ことを報告する、山下梓さんの文章を読みました（「多様な性を生きることを岩手から考える」『現代思想』2015年10月号、96-99）。しばらく経ってから思い

切って山下さんにメールをし、震災後に起きた東北六県での活動の変化についてお話をうかがう機会を得ました。2017年の夏頃までに、山下さんから小浜耕治さん、内田有美さん、前川直哉さんをご紹介いただき、2018年の夏から冬にかけて、山下さんを含めた4名の皆さんへのインタビューが実現しました。

2018年のインタビューは、やはり山下さんの紹介で知り合ったNatasha Foxさんと一緒に行いました。Foxさんは当時、「災害とマイノリティ」をテーマにした博士論文の調査のために、宮城県内に住んでいました。行動をともにする研究仲間ができたことで、東北での旅がとても楽しいものになりました。

2019年度はサバティカルを取得することができたため、4月から8月まで仙台市に滞在し、インタビュー調査を本格化させました。博論執筆のために大学院に戻ったFoxさんに代わり、2019年は前川直哉さんが全面的に調査に参加してくれました。前川さんが福島での活動を通して築いてきた信頼やネットワークがあったからこそ、多くの皆さんにご協力いただけたと思います。前川さんとインタビューに出向いた先々でご当地の日本酒を飲んだことが、いい思い出になっています。

2019年9月から3月は、Foxさんを頼ってバンクーバーで研究生生活を送りました。3月中旬に帰国したときは、新型コロナウイルスの感染が長期化するとは思わず、東北各県で予定されていたプライド（パレード）をコンプリートすべく、スケジュール調整に余念がありませんでした。イベントは、残念ながら中止や延期、オンライン開催などになってしまいましたが、直接会うことが難しいなかでも、つながりを維持するために試行錯誤してくださった皆さんには感謝しかありません。

\* \* \*

この冊子は、東北の活動の広がりやインタビューによって示すことをめざしています。インタビューにもとづいた分析は手付かずのままですが、にもかかわらず、インタビュー内容だけを先に公表するのは、ここに活動のヒントやノウハウがつまっているからです。これから何かしたいと思っている人には、たいへん有益な情報です。

なお、当初は冊子のみでインタビューを公開する予定でしたが、編集を進める過程でそれだけではもったいないと思うようになりました。そこで、許可を頂けた方のインタビューのみ、ウェブサイトに掲載することにしました（東京大学 REDDY <http://www.reddy.e.u-tokyo.ac.jp/>内）。

ここに記録された活動の数々は「ビフォーコロナ」のものですが、コロナ禍の2020年も、東北での活動が前に進み続けていることを見聞きしています。東北の皆さんにふたたびお会いし、「アフターコロナ」の活動についてうかがえる日が早く来ることを願ってやみません。

2021年1月